

## はじめに〜東日本大震災に想う〜

二〇一一年三月、未曾有の大震災が東日本を襲いました。

亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災者の方々が、心身ともに健やかな状態に戻られていることを心から望みます。

私も阪神大震災の日に、神戸市のだ真ん中において、直撃された身です。……無力でした。医者は数人がかりで徹夜で、やっと一人の命を救えるかどうかです。だが自然や災害は一瞬にして数千人の命を奪ってしまふ。高齢者や病人ではなく、元気な若者の命でも瞬時に奪ってしまいます。

ましてや薬や医療器具、水、電気、食料がない被災状態ではいかに無力だったことでしょうか！

自然の大きな力と医療の力のギャップに呆然としました。

われわれ医者が自分たちの非力さに歯噛みし、時に呆然とするのは震災だけではありません

せん。

だからわれわれ医者は決して傲慢ではない、というか傲慢たり得ないでしょう。

先日、当院から転勤していく後期研修医が、送別会でこう言いました。

「私が研修医二年目のときに、祖母が終末期医療となり、家族は私に治療の選択を一任しました。とても悩み、そのとき気がつきました。ふだん指導医や先輩の先生たちは、私たちに優しく指導し、ときばきと判断を下し治療されてるように見えるけれども、自分はまだ経験していない。死」というものに対して、短い時間で決断を下さなければならぬ。

その中で、みんなたぶん、悩み、苦しんで来られたんだろうと気がつきました」

そう、医者も経験が長いほど、多くの悩み、苦しみを経てきています。時に「あの判断、決断は正しかったのか」と後で思う「生身の人間」なのです。

東日本大震災の復旧もそうでしょう。大打撃を受けた電力。一般の方々もみな、専門の人間が進歩した科学の力でなんとかしてくるだろうと思っっている。そうではないのです。現実には東電の社員たちも「生身の人間」。震災直後は入社しても、なすすべもなく呆然としていたそうです。

科学に携わる人間ほど、科学を万能など思っていないません。

原子力発電所で、被曝しながら復旧作業にあたっている現場の社員たちも、みな普通の生身の人間のはず。どんなに恐ろしい思いで働いたことでしょう。彼らの心情を思うと胸が痛みます。

医療もそうです。みな救急で行けば、最先端の医療で何でも診断が付き、治療できると思っている。

だが、どんなベテランの医者でも、まったく見知らぬ人間が意識不明でかつぎこまれてきて、すぐに何かわかるわけがありません。いろいろ推測して検査を選んでいるだけです。医者を「命や寿命に対して介入できるとかんちがいして傲慢」と批判しつつ、「なぜ検査でわからなかったのか」「なぜ百%大丈夫と言わないのか」と怒る矛盾。

「検査すれば何でもわかる」と思うことのほうが「命、自然に対して傲慢」ではないのでしょうか。

この「傲慢」の矛盾にかぎらず、そもそも多くの日本人が「医者はモラル低下した。だめになった」と考えている根拠が、野笛涼先生の言葉を借りれば「一方的で不当な、かつ

非現実的・非科学的」(『なぜ、かくも卑屈にならなければならないのか』へるす出版新書、二〇〇九)です。

たとえば、医者のもラル低下例としてよくあげられる「救急受け入れ不能」。

「患者を治したいという気持ちが強ければ専門外でも診られるはず。訴えられる覚悟で診ろ！」

おかしな理屈です。患者を治したい気持ちが強いということは、「喜ぶ顔が見たい」ということ。その気持ちが強ければ強いほど、「喜ぶ」の対極ともいえるべき「訴えたいほど憎まれる」可能性のあることは、さらにできなくなるのが普通の心ではないでしょうか。こういう意見の理屈がおかしいことにさえ、もう日本人は誰も気づかなくなっています。

これはもうわれわれにはどうしようもない領域なのでしょうか。

われわれ医者にできることは何でしょうか。

日々の忙しい臨床業務の中で、医師はそういうソフト面については考える余裕もなく、診療に打ち込んでいます。

少し立ち止まってゆっくり本書を読んでいただきたいのです。

なぜわれわれ医者はトンデモ批判に反論できないのか？

なぜこんなにマスコミと医者では視点がずれているのか？

なぜ医者の説明はうまく患者に伝わらないのか？

なぜ医者は、亡くなる患者さんに対してよき「おくりびと」になれないのか？

本当に「昔の日本」のほうがよかったのか？

なぜ死、病気は平等でないのか？

……などについて書かせていただきました。

そして本書は、日々頑張っているすべての医療従事者へのエールでもあります。